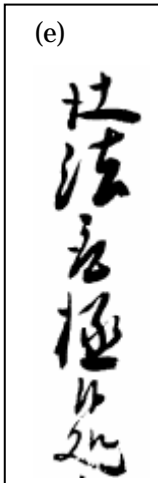


何度も出てくる用語

前回の続きです。(e)は最初の**仕**がやや難しいと思います。



一見すると「仕」に見えます。しかし、その下

の**法**がはっきりと「法」ですので、よく使われる語句の「**仕法**」ではないか、と考えると、

仕も「仕」で矛盾がない、とわかります。次

の**者**は、前回も**者**とほぼ同じ崩して出てき

た「取」。**極**は、第6回や第8回で**極**と出てきた「極」です。崩し方は少しきつくなっていますが、字の雰囲気は同じだと思います。「取極」で「と

りきめ」と読みます。江戸時代は「取決」という字は余り使わないようです。

さて、お気づきの方もいると思いますが、ここ数回は、“第 回で出てきた”という表現が多くなっています。まだ、古文書の文章は3つ目なのですが、何度も出てくるわけですから、使用する語彙が意外と少ないことが実感できます。

次の**ル**は、前回「去ル安永五年」で出てきた**ル**(ル)とよく似ています。次の**処**は、はっきりと「**処**」ですから、「取極ル**処**」か「取極候**処**」か迷いますが、前回と異なり、

ルが行の真ん中に書いてあります。したがってここは「取極候**処**」です。なお、「**ル**のトコロ」という場合、「**処**」「**處**」「**所**」の3つが使われます。

(f)の**年**は「年」。**求**は、力試しになります。「木」という人はいないと思いますが、「求」には見えるかもしれません。しかし「求」とすると右上の「丶」はないし、「年求」では意味も通りません。正解は「**来**」です。「**年来**」なら意味も通ります。これが読めた人は、筆の流れで字を予測できるようになっ

ていると思います。**相**は「相」で、次の**之**がまた難しいのではないでし

ょうか。しかし、筆の流れ方を見ると**立**となっていて、**立**とはなっていないことに気づきます。つまり、最初の筆の入り方が**立**と「丶」を上下に2回書いて

いる、ということです。すると、この字は「立」だとわかります。したがって(f)は「**年来相立**」となります。

